

町文化財専門委員 石龍 豊美

## 眼科医岡正節と長崎出島(1)

江戸時代、日本は鎖国をしていたと学校で習いましたが、今は鎖国という表現は消えつつあります。教科書でも、海外に四つの口が開かれていたことが強調されます。オランダ・中国が寄港する長崎、琉球と隣り合う薩摩、朝鮮と向き合う対馬、北方の蝦夷地(現在の北海道)です。これらは外国やその文化と接し、交易を行う場所でした。確かに幕府は日本人の海外渡航やキリスト教を禁じ、オランダ・中国との交易も長崎に限っていましたが、外国との関係が完全に断絶していたわけではなかったのです。中でも福岡藩は佐賀藩と二年交代で長崎警備を行います。朝鮮からの外交使節(朝鮮通信使)が江戸と往來する際には、糟屋郡相島(新宮町)に必ず立ち寄ることになっていました。四つの口の内の二つと、密接な関係がありました。そのような藩は他にありません。

長崎でオランダ人の居住地が出島に限られていた

の間に、いかに性病が、すなわち皮膚病と眼病が蔓延しているかは一目瞭然である。外科医術についても何度も質問を受けた。私自身が死体を解剖することは禁令にひっかかる。もう一つの障害は外科医療器具の持ち込みが禁止されていることである。」(二〇五〜六頁)

西洋医学を学んでも薬品が入手できないので腕の發揮しようがない、とも述べています。日本に眼病患者が多いことはベルツも指摘することになります。解剖学は西洋医学の基本ですが、オランダ医師は出島で解剖を行うことができなかったため、お手本を示すことができなかったのです。

一八五四年にブルックに教えを受けるために出島に入ることでできた医師は五人、五五年にはそれが八人になり(その中に岡正節)、五六年にはさらに一人増えました。五六年には「各藩が派遣する百五十人に医学の伝習」を行い、「年間延べ五千人の訪問を受けた」としています(二二二頁)。これは言わば集団の学生に講義したのであり、九人の医師は別格だったようです。

「昨年オランダ東インド総督府は事務所用石版印刷機を出島に送ってきた。その時私は日本人に石版印刷機の試し刷りをして見せた。私はドクトルSONEが出島に普通の医師として入島が許されるならば、近日中に印刷技術を披露してもよいと申し出た。この医者は藩で昇格したので、上役人や目付の付き添いなしでは出島に入ることができなくなったのである。ドクトルSONE(原注・筑前)が出島

ことはよく知られています。人工的に扇形に埋め立てられた島、出島に入る橋と門は一つだけ。出入りは許可制で厳重に監視されていました。(写真1・2)須恵町にある「岡松節之墓」(明治二十九年没)の裏面には「安政元年(一八五四)藩命を奉じ、晴陽に遊び、蘭人に就学す」(安政元年奉藩命遊於晴陽就学蘭人)と書かれています。晴陽は長崎です。蘭人は、すなわちオランダ人ですが、私はかつてこれをオランダ商館医ファン・デン・ブルック(一八一四〜六五)であろうと書きました(西日本新聞夕刊、二〇〇三年一月十一日)。その後、これを証明する資料二点が見つかりましたので、ここで報告したいと思えます。岡正節がファン・デン・ブルック(以下、ブルックと略)の弟子に間違いないということは、村田忠一氏が指摘しました(「適塾」四二号、適塾記念会、二〇〇九年十二月一日)。適塾とは福沢諭吉も学んだ緒方洪庵の蘭学塾で、大阪

に通っている時はなおさらのことである。(二二四頁)

「ドクトルSONE」も福岡藩医です。SONEは写真術を学んでいるので、それをヒントにすると、五五年度の報告に「E」と書かれていた人物、つまり河野楨造(養立)と同一人物と思われまします。私は楨造と養立がごっちゃになってゾリーユと書かれた可能性を考えています。河野は化学・写真を中心に学びました。

「ただ医者の主斎(長崎、吉雄主斎)、SONE、Stokes、Kings、長門の周彌(萩、青木周彌)たちが医学の相談に来るだけである。彼らに定期的な医学伝習参加を強力に勧めているが、実現しない。日本政府がその必要性を認めないのか、あるいは私が医学相談を受けている事実気づいていないのか、そのどちらかであろう。私は後者の可能性が大きいとみている。(略)」

ドクトルSONEは私の主要な眼科器具を模造させた。これらの器具は実に精巧に模造されていて、細部まで正確である。」(二二五〜六頁)

おもしろいことに「オランダ通詞会所記録 安政二年萬記帳」(長崎県立長崎図書館)にも岡正節の名が出てきます。通詞は通訳のこと、出島に入る許可がおりると、その名前が通詞会所に通達されます。安政二年一年間の記録ですが、岡正節の出島訪問が目立つというのです。

にありました。

ブルックは一八五五年度(安政二年)、五六年年度の業務報告書をオランダ東インド総督に提出しました。その翻訳がフォス美弥子「ファン・デン・ブルックの伝習」(『日本洋学史の研究』X「一九九二」)に紹介されています。この中に「医師SONE」が出てきますが、ブルックによると彼は福岡藩医で眼科医です。

福岡藩の眼科医は五人いますが、安政二年当時、長崎に派遣されていたのは岡正節(糟屋郡須恵村在住)しかいません。訳者は岡正節の名を知らないのですが、原文通りのSONEと表記したのです。正節は後に松節と改名しました。物理学者でもあったブルックのもとには多くの福岡藩士が訪れ、その中には医師もいますが、さまざまな科学技術を学ぶのが目的でした。幕末の藩主、第十一代黒田長濤のもとで、西洋の学問、文化の導入が積極的に進められていました。長瀬が設立した藩校・養生館(医学学校)は現在の九州大学の源流です。

ファン・デン・ブルックの報告書から岡正節の名を拾ってみましょう。

「総督閣下はこの報告書がこれまで当地の医学事情に触れていないことにお気づきになったと思う。実はごく稀にしか医学に関する質問を受けなかった。原注・筑前藩主の、医師SONEのただけがかなり規則的に眼科の受講に通ってくるだけである。(略)日本国民のためにヨーロッパ医学の導入が必須であることは論議の余地がない。全国一般庶民

習はオランダ軍艦が入港していない時期にも続けられ、テレカラフ(電信)、蒸気機関、フレットモレン(圧延機)、反射炉などの科学技術教育が効果を上げていった。彼に学んだ各藩の藩士は多いが、やはり藩医の出島出入りが目立つ。

佐賀藩の橋本若寿、福岡藩の岡正節・河野楨造、大村藩の尾本孝同らが特に多く、薩摩の相良増洲、長州の松嶋瑞益もいる。」(本馬貞夫、同書解説、七九二頁)

岡正節について、ファン・デン・ブルックは「かなり規則的に眼科の受講に通ってくる」と言い、本間氏は「安政二年萬記帳」に記録されている中で、最も頻繁に出島に出入りした四人の中に数えたのです。



写真1 写真1・2は出島の案内板(石龍撮影)。



写真2

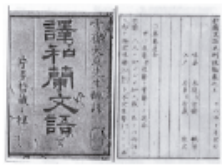


写真3 岡正節が使用したと推測されるオランダ語の文法書、大庭宮斎訳「訳和蘭文語」(後編上、岡正基氏蔵、須恵町誌)一〇〇八頁、一九八三)。安政二年間に刊行された。